

ミクロス マクロ ～文字の小宇宙～

千葉 蒼玄

人がものを考える（創る）場合、その制作過程（考える）において、抽象的（何にもよらないで）に考えることは難しい。日本人なら日本語、特に漢字の造形より連想することが私の場合多い。

文字（漢字）はそれ自体で意味と造形を要しており、象形と内容を兼ね備えている。また単体での意味だけでなく、文章となるとその中に多くの要素が含まれイメージが広がってくる。それが一つの小説となれば、読む人に多くの感覚を感じさせてくれる。

また、その1字1字はミクロ的には一本一本の線の集まりであるが、マクロ的に見ればまた違う形に見える。星が一つ一つなのにそれが集まると、星座になりもっと大きくなれば銀河系になり、もっと大きくなれば銀河の泡構造に、銀河フィラメント、グレートウォールと構成されていく。

また、脳細胞はその一つ一つでは記憶にならないものが、神経シナプスでつながってくると、記憶として定着される。

ミクロ的にみた構造（神経細胞の配置）とマクロ的に見たもの（銀河構造）が同じイメージなのも、この宇宙の神秘のようで興味深い（ミクロス マクロ）。

私の作品「蜘蛛の糸」は、ミクロ的に見れば、小説の一文字一文字であるが、マクロ的に見れば天と地であり、地獄と天国であり、それを繋ぐ蜘蛛の糸であり、それを登っていく韃陀多である。その造形の中に、砂時計（時間）を表現してみた。

また作品「銀河鉄道の夜」では、ミクロ（人間、惑星）が集まって、マクロ（銀河系）を表現してみた。

作品「般若心経」は釈迦を中心に説法を聴く民衆（ミクロ）の集まり（マクロ）を表現した。

「3.11 鎮魂と復活」ロサンゼルス美術館 LACMA に収蔵作品。

人には運命的な出会いが存在する。それが人生により決められたことなのかどうかは後になってわかるものである。3.11 東日本大震災はそれを経験した者にとって大変な衝撃である。石巻という場所に生まれた私にとっても、それは避けては通れない出来事であった。震災後に被災地を訪れた時、被災された民家の壁に張り付いた新聞や雑誌の文字を見た時、それが一つ一つ（ミクロ・人）が集まって生活を、家族、町、地域（マクロ）を構成し、それが超巨大（マキシマム）に見るとそのミクロを破壊してゆく津波のイメージを表現した。